

**令和5(2023)年度
とちぎっ子学習状況調査
結果分析**



下野市教育研究所

令和5年9月

「令和5(2023)年度とちぎっ子学習状況調査」結果分析

令和5年8月
下野市教育委員会

調査について

1 調査の概要（「とちぎっ子学習状況調査」実施要項より一部抜粋）

(1) 調査の目的

本調査の実施により本県児童生徒の学力や学習の状況等を把握・分析し、児童生徒一人一人の課題を明確にするとともに、各学校が組織的に学習指導における検証改善サイクルの構築・運用に取り組むことにより、本県児童生徒の学力向上に資する。

(2) 調査実施日

令和5(2023)年4月18日(火)

(3) 調査対象

小学校調査：小・義務教育学校第4・5学年

中学校調査：中学校第2学年、義務教育学校第8学年

(4) 調査事項及び手法

① 教科に関する調査

- ・小学校調査：国語、算数、理科
- ・中学校調査：国語、社会、数学、理科、英語

② 児童生徒質問紙調査

- ・内 容：学習意欲、学習方法、学習環境、家庭学習等
- ・方 法：選択回答式
- ・質問数：小学校94問、中学校113問

③ 学校に対する調査

学校における指導に関する取組や学習環境等

(5) その他

本調査の結果は、学力の特定の一部であること、学校における活動の一側面であることに留意し、児童生徒の全般的な学習状況への指導・改善等につなげるよう留意する。

2 本市の参加状況 ※参加人数は最も多かった教科のもの

調査対象内訳	参加校数	参加人数
小・義務教育学校第4学年	9校	488人
小・義務教育学校第5学年	9校	476人
中学校第2学年・義務教育学校第8学年	4校	473人

本市の結果について

※小学校には義務教育学校前期過程、中学校には義務教育学校後期課程を含みます。

【教科に関する調査の結果】 ※下野市と栃木県の平均正答率の比較

◎ 大きく上回っている（5ポイント以上） ○ 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
 ー 同程度（±1ポイント未満）
 ▽ 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満） ▼ 大きく下回っている（5ポイント未満）

《小学校》

第 4 学 年			第 5 学 年		
内 容		県との比較	内 容		県との比較
国 語	全 体	○	国 語	全 体	○
算 数	全 体	○	算 数	全 体	○
理 科	全 体	○	理 科	全 体	○

《中学校》

第 2 学 年					
内 容		県との比較	内 容		県との比較
国 語	全 体	○	社 会	全 体	○
数 学	全 体	ー	理 科	全 体	▽
英 語	全 体	○			

各教科の結果について



1 国語

(1) 小学校第4学年

◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
— 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	知識及び技能			思考力、判断力、表現力等		
	言葉の特徴や使い方に関する事項	情報の扱い方に関する事項	我が国の言語文化に関する事項	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
県との比較	○	○	○	○	◎	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	◎

⑤ 考察

- ・教科全体、各種別の正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。
- ・「書くこと」の領域における記述問題（段落の役割を理解し、指定された条件に合わせて文章を記述する設問）では、県平均正答率を大きく上回った。
- ・昨年度、一昨年度の調査結果では、漢字を書く問題に課題が見られたが、今年度は、全ての問題で県平均正答率を上回る良好な結果となった。今後も、漢字の読み書きの定着に向け、継続的な指導をお願いしたい。
- ・言葉の特徴や使い方に関する事項のうち、文中の主語と述語の関係を捉える問題とローマ字の表記に関する問題では、県正答率を下回った。直接扱う小単元の学習時だけでなく他の単元の学習や日常生活での文章を書く活動の中で、主述の関係に気を付けて文章を書く活動や、ローマ字を読み書きする活動を取り入れるなど、継続して学習の場を設け定着を図ることが求められる。

(2) 小学校第5学年

◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
— 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	知識及び技能			思考力、判断力、表現力等		
	言葉の特徴や 使い方に関する 事項	情報の扱い方 に関する事項	我が国の言語 文化に関する 事項	話すこと・ 聞くこと	書くこと	読むこと
県との比較	—	◎	◎	○	◎	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	—	◎

⑤ 考察

・教科全体、各種別の正答率は、県平均正答率と同程度か上回る結果となった。

・昨年度（第4学年時）の結果では、叙述を基に場面の様子を捉えることに課題が見られたが、今年度、同様の内容を問う設問では、県正答率を上回る良好な結果となった。引き続き、心情の変化や場面の移り変わりが分かる叙述に着目しながら読み深められるよう、言語活動や発問の工夫をお願いしたい。

・例年課題が見られる「漢字を書く問題」に関しては、3問中2問は県正答率を上回った。一方で、送り仮名のある漢字を書く問題では、県正答率を大きく下回った。新出漢字の学習では、反復練習だけではなく文章の中で正しく用いることができるよう指導することが重要になる。一例として、漢字辞典を用いて漢字のもつ意味や他の読み方を調べる活動が挙げられる。継続的に実施することで、漢字の習得だけでなく語彙の充実も期待できる。

(3) 中学校第2学年

◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
－ 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	知識及び技能		思考力、判断力、表現力等		
	言葉の特徴や使い方に関する事項	我が国の言語文化に関する事項	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
県との比較	○	▽	○	◎	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

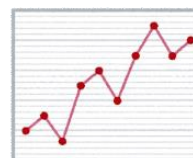
	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	◎

⑤ 考察

- ・「我が国の言語文化に関する事項」の領域を除き、教科全体、各種別の正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。
- ・「書くこと」の領域における記述問題では、県平均正答率を大きく上回った。指定された条件に合わせて、読み取った内容を基に自分の考えを明確にして文章を記述する力が、全体的に定着していると考えられる。
- ・歴史的仮名遣いに関する問題では、正答率が1割を切り、県正答率を下回った。授業改善の一例として、仮名遣いを覚えることに重点を置くのではなく、古文のリズムや響きに慣れ親しみながら正しく理解できるよう、音読を取り入れながら学習を進めるなどの工夫が考えられる。
- ・昨年同様、送り仮名のある漢字を書く問題では正答率が低くなる結果となった。新出漢字の学習では、その漢字の持つ意味や、教材文で扱っていない読み方にも目を向けさせ、文章中で正しく用いることができるように指導していくことが重要である。

2 算数・数学

(1) 小学校第4学年



◎	大きく上回っている（5ポイント以上）
○	上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
—	同程度（±1ポイント未満）
▽	下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
▼	大きく下回っている（5ポイント以上）

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	数と計算	図形	測定	データの活用
県との比較	○	◎	◎	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	◎

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	◎

⑤ 考察

<ul style="list-style-type: none"> ・教科全体、各種別全ての正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。 ・「数と計算」の領域において、分数の表す大きさを正しく理解できていない傾向が見られた。分数を数として捉えることができるようにするために、分数を数直線の上に表示するなどの指導の工夫が必要である。さらに、小数と分数を同一の数直線の上下に表し、大きさが同じ数であることを実感できるようにすることが大切である。 ・「図形」の領域において、円の中心とコンパスの使い方についての理解を見る問題や、円の性質を考えコンパスを使って正三角形が作図できることを説明する問題において、正答率が県平均正答率を大きく上回った。引き続き、作図などを通して、円の性質に気付かせる指導の工夫が大切である。
--

(2) 小学校第5学年

- | |
|----------------------------|
| ◎ 大きく上回っている (5ポイント以上) |
| ○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満) |
| － 同程度 (±1ポイント未満) |
| ▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満) |
| ▼ 大きく下回っている (5ポイント以上) |

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	数と計算	図形	変化と関係	データの活用
県との比較	○	○	◎	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	◎

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	◎

⑤ 考察

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・教科全体、各種別全ての正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。・「データの活用」の領域において、二次元表の読み方を理解していない児童が多く見られた。A、Bの二つの観点からデータを調べるとき、二つの観点から物事を分類整理したり、論理的に起こり得る場合を調べたり、落ちや重なりがないように考えたりすることができるような指導が求められる。・「変化と関係」の領域において、伴って変わる2つの数量の関係について分かることを説明する問題では、正答率が県平均正答率を大きく上回った。引き続き、一方の数量を決めれば他の数量が決まる、あるいは、一方の数量は他の数量に伴って一定のきまりに従って変化する、というような見方で数量の関係を見て、分かったことを説明することができるよう指導することが大切である。 |
|--|

(3) 中学校第2学年

◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
— 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	—

② 学習指導要領の領域別正答率

	数と式	図形	関数	データの活用
県との比較	—	○	○	—

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	—	○

④ 問題形式別正答率

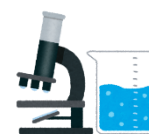
	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	—	○

⑤ 考察

- ・教科全体、各種別全ての正答率において、県平均正答率と同程度か上回る結果となった。
- ・「数と式」の領域において、素因数分解の仕方や表し方が理解できていない傾向が見られた。素因数分解での表し方は一通りに決まり、分解の順序が違っても、整理すると結果は同じ素数の積になることを、活動を通して具体的に知ることができるようにすることが大切である。
- ・「図形」の領域において、回転移動した角度について理解できている生徒が多く見られた。引き続き、移動に関する内容を、図形の位置関係や相等関係、作図に関する内容と相互に関連付けながら取り扱うことで、平面図形についての理解を一層深めるとともに、図形に対する見方をより豊かにすることができるよう指導することが大切である。

3 理科

(1) 小学校第4学年



◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
— 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	「エネルギー」を 柱とする領域	「粒子」を 柱とする領域	「生命」を 柱とする領域	「地球」を 柱とする領域
県との比較	○	◎	○	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	◎	○

⑤ 考察

<ul style="list-style-type: none"> ・教科全体、各種別全ての正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。特に、「粒子」の領域で県の平均正答率を大きく上回った。 ・昨年度に引き続き、「虫眼鏡の使い方」について、虫眼鏡を顔の近くで固定して対象物を動かすことについて理解できていない児童が多く見られた。学年が上がると「虫眼鏡」に代わり「ルーペ」を使用することになるが、使い方は同じである。動植物の観察の際には常に虫眼鏡を持ち歩き、観察する習慣を身に付けるなど、使用する機会を増やして、正しく確実に使い方を理解させることが大切である。 ・昨年度課題の見られた「物の重さと体積の関係についての問題」において、県の平均を大きく上回った。引き続き、授業の実験において、数値上の比較だけでなく、実際に同じ重さで体積の異なる物質や同じ体積で重さの異なる物質を児童自身に比較させ、実感を伴った理解につなげることが大切である。

(2) 小学校第5学年

- | |
|----------------------------|
| ◎ 大きく上回っている (5ポイント以上) |
| ○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満) |
| — 同程度 (±1ポイント未満) |
| ▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満) |
| ▼ 大きく下回っている (5ポイント以上) |

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	「エネルギー」を 柱とする領域	「粒子」を 柱とする領域	「生命」を 柱とする領域	「地球」を 柱とする領域
県との比較	○	○	○	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	○

⑤ 考察

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・教科全体、各種別全ての正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。・「エネルギー」領域の「電気回路に関する問題」では、回路を流れる電流の大きさや向きについて、実験で得られた結果と知識を結び付けて理解することや、1つの実験結果から別の実験結果を推測することにおいて、正答率が県平均と比べて特に高い傾向が見られた。・「粒子」領域の「もののあたたまり方に関する問題」のうち、「水」のあたたまり方の問題では、県の平均正答率を下回り、理解に課題が見られた。水を多く入れた試験管の底の部分を加熱したとき、水は上の方から先にあたたまり、その後下の方があたたまっていくことについては、実際に示温インクや示温テープを用いた実験により視覚で確かめ、さらに、その事象を児童自身の言葉で言語化することで、確実な理解につなげる指導が重要である。 |
|---|

(3) 中学校第2学年

◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
— 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	▽

② 学習指導要領の領域別正答率

	エネルギー	粒子	生命	地球
県との比較	—	▽	▽	▽

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	▽	▽

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	▽	▽	▽

⑤ 考察

<ul style="list-style-type: none">・「エネルギー」領域を除く全ての領域において、県平均正答率を下回る結果となった。また、観点別、問題形式別に見ても、全て県平均正答率を下回る結果となった。・「粒子」領域の「気体の性質を調べる問題」では、気体を発生させる方法についての個別の知識と、性質に応じた気体の集め方についての理解に課題が見られた。授業において、発生する気体を予想し、気体収集方法を自ら考え、結果を踏まえて再度計画を見直すなど、粘り強く実験し、得られた結果を表に整理するなどして、確実な知識として身に付けることが大切である。・「地球」領域の「堆積した地層の状態から当時の様子を推察する問題」では、川から海に土砂が流れ込む際に、粒子の大きさによって堆積する位置が異なることと、地殻変動とを組み合わせる必要がある。授業において、個別の知識を組み合わせる考えたり話し合ったりする機会を設けるなどの学習活動を工夫することが考えられる。

4 社会

○中学校第2学年



- | | |
|---|-------------------------|
| ◎ | 大きく上回っている（5ポイント以上） |
| ○ | 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満） |
| — | 同程度（±1ポイント未満） |
| ▽ | 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満） |
| ▼ | 大きく下回っている（5ポイント以上） |

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	地理	歴史
県との比較	—	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	—	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	—	—	○

⑤ 考察

- ・教科全体、各種別の正答率において、県平均正答率と同程度か上回る結果となった。歴史分野における記述問題（示された資料から社会的事象について考察した内容を記述する設問）の正答率が高い傾向が見られた。
- ・地理分野では、資料から得られた情報から該当する地域を考察して地図上から選ぶ問題に課題が見られた。地名やその地理的な特徴を覚えることのみを重視するのではなく、複数の資料から必要な情報を引き出し関連付けながら、社会的事象について考察する場を設けるなどの工夫が求められる。
- ・歴史分野では、毎年、中世における武士の成長に関する問題に課題が見られる。今年度は、県の平均正答率を約7ポイント上回ったものの、正答率は3割程度に留まり、無解答率は3割を超えた。生徒の課題意識を基に学習課題を設定したり、歴史的な事象が起きた要因や後世への影響等、前後の時代とも関連させながら総合的に考察する場を設けたりするなど、用語の理解に留まることがないように、単元の指導計画を工夫することが必要である。

5 英語

○中学校第2学年



- ◎ 大きく上回っている（5ポイント以上）
- 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- － 同程度（±1ポイント未満）
- ▽ 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- ▼ 大きく下回っている（5ポイント以上）

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	聞くこと	読むこと	書くこと
県との比較	○	○	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	◎

⑤ 考察

- ・教科全体、各種別の正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。
- ・英文の内容や概要を正しく聞き取る問題、語形や語法を理解しているかを確認する問題、英文から必要な情報や概要を読み取る問題については、正答率が県平均と比べて特に高い傾向が見られた。
- ・英文を聞き取り、尋ねられたことに対して自分の考えを簡潔に答える問題については、正答率が低い傾向が見られた。また、対話の流れに合った英文を書く問題、読み取った内容を踏まえてつながりのある英文を書く問題については、無解答率が4割程度に上っている。授業において、コミュニケーションを行う目的や場面を明確にした言語活動を取り入れ、聞いたり読んだりした内容について、自分の考えや気持ちを話したり書いたりするなど、他の領域と関連付けた学習活動を工夫することが考えられる。

児童生徒質問紙調査の結果について

1 概要

質問別肯定率が算出できる項目における回答率の県平均との比較を行った（小学校調査 85 項目、中学校調査 104 項目）。

小学校第 4 学年では 76 項目、第 5 学年では 60 項目が同程度または上回る結果となった。中学校第 2 学年においては、86 項目が同程度または上回る結果となった。

2 各学年の結果

(1) 小学校第 4 学年

【特に良好な結果となった項目】

学校の宿題は、やりたくなる内容だ
歴史上の人物やできごとをあつかっているテレビを見たり本を読んだりするのは好きだ
授業の最後に、学習したことをふり返る活動をよく行っている
時間を上手に使うことを、心がけている
国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いている

【課題が見られた項目】

家で、学校の授業の予習をしている
学校の宿題の量はちょうどよいと思う。
むずかしいことでも、失敗をおそれないでちょう戦している

(2) 小学校第 5 学年

【特に良好な結果となった項目】

新聞を読んでいる。
毎日、同じくらいの時こくにねている
家で、学校やじゅくの決められた宿題のほかに自分で考えた勉強をしている
次の教科の問題をとく時間は十分でしたか。 算数
次の教科などの学習は好きですか。 理科

【課題が見られた項目】

算数の授業で学習したことをふだんの生活の中で活用できないか考えている
授業で分からないことがあると、先生に聞くことができる
時間を上手に使うことを、心がけている

(3) 中学校第2学年

【特に良好な結果となった項目】

授業の最後に、学習したことをふり返る活動をよく行っている
次の教科などの学習は好きですか。 音楽
次の教科などの学習は好きですか。 英語
家で、学校の授業の復習をしている
勉強していて、「不思議だな」「なぜだろう」と感じることもある

【課題が見られた項目】

次の教科などの学習は好きですか。 技術・家庭
次の教科などの学習は、将来のために大切だと思いますか。 技術・家庭
数学の授業で学習したことをふだんの生活の中で活用できないか考えている

(4) 考察

- ・昨年度は、小学校調査、中学校調査共に家庭学習に関する内容について、県の肯定的回答率を下回った項目が多く見られたが、今年度、小学校5年生、中学校2年生では良好な傾向が見られた。各中学校区では、中学校・義務教育学校後期課程の定期考査の時期に合わせて、家庭学習への取組を意識付けする期間を設けたり、参考になるノートを掲示したりするなど工夫を続けてきた。このような取組や保護者への啓発が意識の向上に影響していると考えられる。今後も、児童生徒が自ら学習内容を工夫し、計画的に取り組むことができるよう、継続した働き掛けをお願いしたい。
- ・授業に関する内容では、授業で学習したことを日常生活や将来に活用することに関する項目で県平均回答率を下回る傾向が見られた。単元・題材の学習の中で日常生活との関連を意識した課題を設定したり、学習内容を今後の生活にどのように活用していきたいか考えさせたりする場を設けるなど、児童生徒が学ぶことの必然性を実感できるような工夫が求められる。

今後、分析結果を学習指導や生活指導の工夫改善等に生かし、児童生徒のさらなる学力向上につなげていきます。